

家人に行く先を告げることなく、ふらりと家を出て、また黙ってフラリと帰ってくる、しかし何も言われない、吾輩は猫である。もともと何度もつまみ出されながら、無理やり居候になったのだから、坊っちゃんたちが気に留めないのも無理はない。そこで吾輩はしばらく旅に出ることにした。まずは熊本へ行くことにしよう、と思ったが遠すぎるので、東京近郊の山にする。

さて、ヒラリと無賃乗車を決め込んで数時間。バスに乗り継ぎ小一時間。降りてしばらく歩くと目の前に山がある。登り始めたのはよいが、行路は思いのほか陰しく、道草をくわずに歩いても猫の足ではかなり時間がかかる。山の上にも自販機がある昨今、茶屋があると思って弁当を持ってこなかったのは、都会猫の迂闊であった。腹が減って仕方がないが、日も暮れかかってきたので今夜は野外の草枕で一夜を明かすとするか。

そこで寝床を探して歩いていると、草がきれいに左右に分かれていく。吾輩が踏んだせいじゃない。野分のせいだ。よく考えたら、いや、考えなくても二百十日じゃないか。ついこのあいだ虞美人草を見たと思ったが、月日の経つのは早いものだ。ところで、琴のそら音か、幻聴か。風に混じって變な音が聞こえてくる。何だろう？吾輩は恐る恐る音のする方へ歩いて行った。

すると、そこには一人の坑夫がいた。今どき炭坑はないはずなのに何を掘っているのだろう、といぶかしげに見ていると、「お〜い、三郎」ともう一人やって来た。「天気も荒れそうだし、もう暗くなってきたから切り上げようぜ、期日は彼岸過迄だし。ほら」と旨そうな握り飯を差し出す。うう、腹にこたえる。「おや、あんなところに猫がいるぜ」ヤバイ、気付かれた。「怖くないよ、こっちにおいで」と招くが、心やさしい人かどうかわからない。吾輩が躊躇していると、握り飯を少しちぎって放ってくれた。ありがたい。吾輩は感謝して食べた。それから吾輩は大きな木の陰で眠りに就いた。猫は夜行性とはいえ、きょうは歩きすぎたので寝る。

あくる日、目覚めてみると風は収まっていたので、台風はそれたようだ。又うんうんと山路を登っていくと、下って行く行人の一団と出くわした。振り返ると、倫敦塔のような形の作りかけの小さな建物が見える。成程、きのうは近くで見上げていたので全体が見えなかったが、あの二人が作っていたのはこれだったんだな、と合点がいく。ここは自然公園になるようだ。そうして吾輩は所々のペットショップでにゃごにゃごとカリカリをねだりながら、旅を続けた。

4日ぶりに家の門をくぐる。吾輩を見るなり「今までどこをほつつき歩いていたんだ。しょうがない奴だな」と主人が言った。吾輩のことを気に掛けてくれるのは主人だけだ。嬉しかった。

それからやや退屈な長い月日が過ぎ、吾輩はまた旅に出たくなった。しかし今は夏だから、熱中症になると困るので、もう少し後にしよう。暇つぶしに子規の畫の額が飾ってある主人の部屋へ入ると、工芸趣味の遺傳のせいで買った紫檀の机の上に手紙が置いてある。「京に着ける夕にお待ちしています」とある。おや、怪しいぞと思ったら、差出人は坊さんだった。参禅には賛成だな。というのは、この間のことである。ケーベル先生の離日に際して、主人が書いたケーベル先生の告別の辞に誤植があった。「校正係がボケたのは戦争で忙しかったからで、これも戦争から来た行違ひだ」と冷静に公言したが、几帳面な主人のことだから腹の中では癩癩を起していたに違いない。行けば気分も変わるだろう。その間、吾輩は文鳥を追いかけている夢でも見ながら硝子戸の中で初秋の一日を過ごすとしてしよう。

そうして主人は9月中頃までゆっくり遊んできた。しかし吾輩に土産はない。彼岸になると主人は三山居士の墓参りへ出かけた。その薤露行で、主人は思ひ出す事など多々あったようだ。「長谷川君と余では、むごうのほうが頑丈だったのに」と運命の明暗を思いながら故人を偲んでみたり、滿韓ところどころで見た戦争の爪痕に思いを馳せたりしながら、何を思ったか幻影の盾を描こうと意気込んだが、何せ幻なのだから形が思いつかない。画は止めてカール博物館の資料を取り出してしばらく眺めていたが、眠気を催したらしく横になった。主人は寝れば必ず夢を見る。夢十夜どころか夢百夜まで記録更新するかもしれない。吾輩の去年の登山体験は、永日小品まで待てないから、短日小品として書いてもらおう。(2015.8.23)